

第四十二回「富山県中学生水の作文コンクール」入賞作品講評

委員 浜谷 尚生

高尾 公子

古川 桂子

総 評

今年度の応募総数は302編、応募校は4校でした。各学校の校内審査を経て寄せられた29編から、3人の審査員で優秀賞3編、入選5編を選出しました。

入賞作品に共通することをいくつか述べたいと思います。まず挙げられるのは、作品に取り組む動機が明確だということです。それぞれが経験した事柄の場所や期間、接した人々など異なりますが、そこからぜひ書いておきたいという気持ちがあふれ積極的に作品に取り組んだことが読み取れます。

次にそれぞれの作品の独自性を挙げたいと思います。つまりその人独自の考え方や取り組み方が見られること、言いかえればその人でなければ書けない文章だということです。表現についていえば、ここにもそれぞれの持ち味がありました。きっぱりとした口調で訴える文体もあれば、論理的な表現と構成で説得力を増す作品、しつとりとして情感あふれる言い回しで自分の世界に引き込む筆者などそれぞれの個性が感じられました。これらのことはみなすばらしい作品を生むために大切な事柄として、次の作品に生かしてほしいと思います。

入賞作品講評

優秀賞（3編）

「水を知る」という責任

黒部市立清明中学校 二年 橋詰 翠咲

くろべ水の少年団に所属した経験を短い文章の中に生かし切っています。水質、水温、流れの速さなど科学的な調査の体験もさることなが

ら、活動を通して触れた自然の描写がすばらしく、筆者の感受性の豊かさが表れています。これらの記述から「水こそがすべての命を支える源なのだ」ということを「体で」感じたという言葉に実感がこもります。続いて、家族とイタイイタイ病資料館を訪れた部分からは、水質汚染についての関心の深さを知り、一つ一つの言葉から筆者の強い思いが伝わります。

後半、水を守ることは自然を守ることだけではなく、人の健康や暮らし、ひいては人間の尊厳にもつながると述べました。そのために、知ること、伝えること、未来へ引き継いでいくことの大切さを説いています。読み手は、題名で示されたことの意味とそのことについての筆者の思いの深さを知るのです。

水の旅―立山から富山湾へ―

富山大学教育学部附属中学校 二年 奥 望帆子

この作品を題名から単に水を擬人化した旅日記と考えたら大違い。流れ下る水が途中で果たす役割が、余すところなく描かれているのは見事です。それも一つ一つの事実が「岩肌を滑り・仲間たちと」「そつと取り除いてくれる」など情感豊かな表現に支えられ、読み手は、視覚、聴覚、触覚など五感をフルに働かせ、情景を鮮やかに心に浮かべながら読み進めるのです。考え抜かれた構成、無駄がなく引き締まった表現、中でもところどころにちりばめられた比喩表現の見事さに驚かされます。

結びの文章で、海へ流れ着いた水が再び蒸発し、雲となり、立山に降り注ぐことに触れ、その壮大な循環に人間も参加していることを忘れません。そのことは、冒頭の「私の体もまたつながっている」という言葉から、これからの向き合い方を思う筆者自身の前向きな気持ちを感じるのです。ちなみに奥さんは昨年に続く優秀賞です。

豊かな水を未来に

富山大学教育学部附属中学校 三年 牧野 葵

「私の通学路には大きな橋がある」で始まった文章は「私は今日も神通大橋を渡る」と結ばれます。この技法で文章全体が柔らかな包装紙で包まれた様な感じがします。筆者自身の肌の悩みの改善が富山の水によると考えたことがきっかけで調査を始めました。仮説から検証、結論とその間の準備について端的に述べられています。

さらに富山の地形などを調べることで豊富な軟水が生み出される根拠が示されて、読み手の理解を助け、説得力のある作品になりました。筆者の驚きを読者も共有すると思います。また富山の水礼賛にとどまらず、公害や水質汚染、ライフラインの老朽化に触れたことは内容のバランスをとるのに役立ったと思います。さらに先人の苦労や努力に触れ「すべて未来からの借り物」と述べたのは、まさに筆者独自の受け止め方ですばらしい。

入選（5編）

私たちに見えない水

小矢部市立津沢中学校 三年 長谷川 心優

題名は作品の顔として、また読み手を引き付ける役割として大切です。読者は見えない水って何だろうと興味をもつでしょう。また説明文の場合、題名は作品のテーマだったり内容のもっとも短い要約だったりします。その意味でこの題名はよく考えられていると思います。作品は問いかけて始まり、呼びかけで結んでいますが、読み手を意識して書き進めたのでしょう。断定表現が多く説明口調になっていますが、あいまいさがなく、読み手の見えない水についての理解を助けています。

後半、筆者は日常取り組めることを考えましたが、いずれも具体的に示されているので実行につながりやすくすばらしいと思います。

心をつなぐ水

高岡市立牧野中学校 一年 山本 さくら

いたち川延命地藏尊を訪れた経験というきわめて限られた内容なのですが、そこからくみ取れる筆者の思いはきわめて広く深い。小説蜚川についての叙述、母の健診結果についての不安と現地での状況などが動画を見るように言葉で表現されています。

生命の維持と身体の活力の源としての大切さを強調する作品が多い中で、人の心を癒し、前を向く力を与える水といったとらえ方をした作品は少なく、その意味でも捨てがたい作品でした。人々の温かい手と祈りによって守られている水だからこそ、多くの人々の心を支え慕われ続けているという筆者の思いに深く共感させられます。明快な段落分けと美しい表記にも惹かれる作品でした。

お父さんたちのえざらい

高岡市立牧野中学校 一年 新開 朱莉

筆者が意図的に「側溝清掃」を使わず「えざらい」を使ったのは、そのあとの記述で読み手が現地に居合わせたような臨場感を生み効果的だったと思います。えざらいをやらなかった場合の問題点を4つに分けて、何が起きて結果はどうなるかを分析的に述べているのはすばらしい。論理的な叙述は理解を助け説得力を増すからです。

環境にいいことについて述べた部分にも同じことが言え、起こりうることできめ細かく網羅されていて読者もそこから学ぶことが多いと思います。最後に、えざらいを続けることの大切さと、携わる人たちの高齢化からそれが難しいことに触れたことにも筆者のえざらいへの思いの深さが読み取れます。

大切な水

高岡市立牧野中学校 一年 渡邊 ひなの

「地球には海があるのにどうして水不足に」という疑問から始まった調査でしたが、その結果導かれた幾つかの数値は筆者を驚かせました。優れた作品は自身の中で生まれた素朴な、時には切実な疑問と、答えを知った驚きや感激から初めて生まれるのだと改めて思います。また、具体的な数値を示すことは文章の説得力を増します。

海水を飲み水というアイデアを取り上げた作品は少なく、その方法を調べたのは独自の発想でした。それが簡単ではないという結論にも渡邊さんは納得したでしょう。

後半、私たちにできることを考え、短い段落に具体的な取り組みがぎっしり述べられています。深く考えていなかったことを家族全体でという言葉がうれしい。

身近な「水」の価値を知る

黒部市立清明中学校 二年 高島 爽稀

富山駅構内で見かけたたくさんの水のペットボトルが富山市の水道

水で、それが世界的な食品評価機構で最高賞を受けている事実、「私は驚愕した」というのはまさに高島さんの実感であり、決してオーバーな表現ではないことが文面から伝わります。そしてこの作品を通して多くの人たちにそのことを知ってほしいとさえ思うのです。

さらに富山県には砺波の瓜裂清水ほか七か所が名水百選に選ばれており、自宅近くにもと驚きが重なりますが、全文がこれまでそれらに気づかなかつたことを知った驚きにあふれています。これからの心がけとして水の出しっぱなしとゴミのポイ捨て禁止を挙げましたが、筆者の行動は決してそれだけにとどまらないでしょう。